『変身』

作 フランツ・カフカ　訳 原田義人

ある朝、グレゴール・ザムザが気がかりな夢から目ざめたとき、自分がベッドの上で一匹の巨大な毒虫に変ってしまっているのに気づいた。彼は甲殻(こうかく)のように固い背中を下にして横たわり、頭を少し上げると、何本もの弓形(ゆみがた)のすじにわかれてこんもりと盛り上がっている茶色の腹が見えた。その上には、かけぶとんがすっかりずり落ちそうになっていた。ふだんの大きさに比べると情けないくらいかぼそいたくさんの足が自分の眼の前にしょんぼりと光っていた。

「おれはどうしたのだろう?」と、彼は思った。夢ではなかった。

「もう少し眠りつづけて、ばかばかしいことはみんな忘れてしまったら、どうだろう」と、考えたが、全然そうはいかなかった。というのは、彼は右下で眠る習慣だったが、この今の状態ではそういう姿勢を取ることはできない。いくら力をこめて右下になろうとしても、いつでも仰向(あおむ)けの姿勢にもどってしまうのだ。百回もそれを試み、両眼を閉じて自分のもぞもぞ動いているたくさんの脚を見ないでもすむようにしていたが、わき腹にこれまでまだ感じたことのないような軽い鈍痛を感じ始めたときに、やっとそんなことをやるのはやめた。

「旅廻りのセールスマンだなんて、ああ、なんという骨の折れる職業をおれは選んでしまったんだろう」と、彼は思った。「毎日、毎日、旅に出ているのだ。汽車の乗換え連絡、不規則で粗末な食事、たえず相手が変って長つづきせず、けっして心からうちとけ合うようなことのない人づき合い。まったくいまいましいことだ!」彼は腹の上に軽いかゆみを感じ、頭をもっとよくもたげ、仰向けのまま身体のかゆい場所を見つけた。その場所は小さな白い斑点

に被(おお)われていた。そこで、一本の脚でその場所にさわろうとしたが、すぐに脚を引っこめた。さわったら、身体に寒気がしたのだ。

妹は彼の嗜好(しこう)をためすため、いろいろなものを選んできて、それを全部、古い新聞紙の上に拡げた。半分腐った古い野菜、固まってしまった白ソースにくるまった夕食の食べ残りの骨、一粒二粒の乾(ほし)ぶどうとアーモンド、グレゴールが二日前にまずくて食えないといったチーズ、何もぬってはないパン、バターをぬったパン、バターをぬり塩味をつけたパン。そのほかに、永久にグレゴール専用ときめたらしい鉢を置いた。それには水がつがれてあった。そして、グレゴールが自分の前では食べないだろうということを妹は知っているので、思いやりから急いで部屋を出ていき、さらに鍵さえかけてしまった。それというのも、好きなように気楽にして食べてもいいのだ、とグレゴールにわからせるためなのだ。

そこで食事に取りかかると、グレゴールのたくさんの小さな脚はがさがさいった。彼は早くもチーズをがつがつ食べ始めた。ほかのどの食べものよりも、このチーズが、たちまち、彼を強くひきつけたのだった。つぎつぎと勢いきって、また満足のあまり眼に涙を浮かべながら、彼はチーズ、野菜、ソースと食べていった。ところが新鮮な食べものはうまくなかった。その匂いがまったく我慢できず、そのために食べようと思う品を少しばかりわきへ引きずっていったほどだった。もうとっくにすべてを平らげてしまい、その場でのうのうと横になった。

グレゴールは、一、二メートル四方の床の上ではたいしてはい廻るわけにいかなかったし、床の上にじっとしていることは夜(よ)なかであっても我慢することがむずかしく、気ばらしの

ために壁の上や天井を縦横十文字(じゅうおうじゅうもんじ)にはい廻る習慣を身につけていた。彼ははい廻るときに身体から出る粘液(ねんえき)の跡をところどころに残し、とくに上の天井にぶら下がっているのが好きだった。床の上にじっとしているのとはまったくちがう。息がいっそう自由につけるし、軽い振動が身体のなかを伝わっていく。グレゴールは天井にぶら下がっている時、ほとんど幸福な放心状態にあった。

父親は両手をズボンのポケットに突っこんで、にがにがしい顔でグレゴールのほうへ歩んできた。するとグレゴールのすぐそばに、何かがやんわりと投げられて落ちてきて、ごろごろところがった。それはリンゴだった。すぐ第二のが彼のほうに飛んできた。父親は彼を爆撃する決心をしたのだった。食器台の上の果物皿からリンゴを取ってポケットにいっぱいつめ、今のところはそうきちんと狙ねらいをつけずにリンゴをつぎつぎに投げてくる。

やわらかに投げられた一つのリンゴがグレゴールの背中をかすめたが、別に彼の身体を傷つけもしないで滑り落ちた。ところが、すぐそのあとから飛んできたのがまさにグレゴールの背中にめりこんだ。突然の信じられない痛みに、グレゴールはまるで釘づけにされたように感じられ、五感が完全に混乱してのびてしまった。

「お父さん、お母さん」と、妹は言って、話に入る前に手でテーブルを打った。「もうこれまでだわ。あなたがたはおそらくわからないのでしょうが、わたしにはわかります。こんな怪物の前で兄さんの名前なんかいいたくはないわ。だから、わたしたちはこいつから離れようとしなければならない、とだけ言うわ。こいつの世話をし、我慢するために、人間としてできるだけのことをやろうとしてきたじゃないの。だれだって少しでもわたしたちを非難することはできないと思うわ」

「これのいうのはまったくもっともだ」と、父親はつぶやいた。まだ十分に息をつけないでいる母親は、狂ったような目つきをして、口に手を当てて低い音を立てながら咳をし始めた。

「あいつはいなくならなければならないのよ」と、妹は叫んだ。「あいつがグレゴールだなんていう考えから離れようとしさえすればいいんだわ。もしあいつがグレゴールだったら、人間たちがこんな動物といっしょに暮らすことは不可能だって、とっくに見抜いていたでしょうし、自分から進んで出ていってしまったことでしょう。そうなったら、わたしたちにはお兄さんがいなくなったでしょうけれど、わたしたちは生き延びていくことができ、お兄さんの思い出を大切にしまっておくことができたでしょう。ところが、この動物はわたしたちを追いかけ、きっと住居全体を占領し、わたしたちに通りで夜を明かさせるつもりなのよ！」

「ちょっとごらんなさいよ。のびていますよ。ねていますよ。すっかりのびてしまっていますよ！」手伝い婆さんが叫んだ。

「死んだの？」と、母親は言ったが、調べなくともわかることだった。

「そうだと思いますね」と、手伝い婆さんはグレゴールの死骸を箒（ほうき）でかなりの距離、押してやった。母親は、箒を押しとめようとするような動作をちょっと見せたが、実際にはそうはしなかった。「これで」と、父親が言った。「神様に感謝できる」

彼は十字をきった。三人の女たちも彼のやるとおり見ならった。死骸から眼を放さないでいたグレーテが言った。「ごらんなさいな。なんてやせていたんでしょう。もう長いこと全然食べなかったんですものね。」

事実、グレゴールの身体はまったくぺしゃんこでひからびていて、もう小さな脚では身体

がもち上げられなくなり、そのほかの点でも人の注意をそらすようなものがまったくなくなってしまっていた。

「グレーテ、ちょっとわたしたちの部屋へおいで」と、母親は悲しげな微笑を浮かべていった。グレーテは死骸のほうを振り返らないではいられなかったが、両親につづいて寝室へ入っていった。

手伝い婆さんはドアを閉め、窓をすっかり開けた。朝が早いにもかかわらず、すがすがしい空気にはすでにいくらかなま暖かさがまじっていた。もう三月の末だった。

底本：「世界文学大系５８　カフカ」筑摩書房
１９６０（昭和３５）年４月１０日発行